

## ある幸徳秋水旧蔵本の命運

昭和57年初春。秋の「個人文庫展」畠山（義成）文庫を調査中、書庫内で次の一冊を発見した。米国の社会主義者ミルズ（Walter Thomas Mills, 1856-1942）の「生存のための闘争*The struggle for Existence*（Chicago, International School of Social Economy, 1904. 640p.）（請求記号62—119）がそれである。大逆事件で有名な幸徳秋水の旧蔵書らしく「幸徳図書」の印記がある。

明治42年8月24日の帝国図書館購求本の一つで、神田の松村音松書店（現在の店主の先々代）から金3円50銭で入手した。この時同書店から、本書を含め10冊購入、合計23円55銭支払っている。ちなみに1冊を除き現在9冊が確認できる。

このミルズの著作の見返しには、「STUDY SOCIALISM」の標題の下に、「20世紀の運動」と銘打ち、リチャードソンの「社会主義入門」以下、ミルズの本書に至る20数点を、価格と共に列挙し、末尾に入手案内を記した紙片が添付されている。その上に“Local San Francisco Library Ass'n, SOCIALIST PARTY”の見出しに続き、次の6か条の貸出し規則を定めた小片を張り付ける。「当文庫の初回利用料金は1ドル。図書は清潔に保ち、良好な状態で返却すること。貸出期間は1か月。超過料金は一日につき5セントの罰金を課す。非会員は貸出利用料金として月25セント支払うこと」がそれである。見返し上辺の“No. 71”の書き入れは、

サンフランシスコ社会党文庫の第71冊を意味するものであろうか。

また見返しの遊び紙には“D. KOTO-KU”（幸徳伝次郎の意か）のペンによるサインと「幸徳図書」の朱印（標題紙にもあり）がある。

秋水が本書を入手した経緯は明らかではないが、彼は明治38年（1905）出獄後11月渡米し、翌年6月帰国している。その間サンフランシスコ社会党に入党（1905年12月14日）した。翌年3月22日「図書館に行き」「翌日書籍を借り来る」と渡米日記にあるが、どの図書館が明確ではないが、その前後社会党文庫から借出しそのままになったものであろう。当時同市は有名なサンフランシスコ大地震（1906年4月18日）と、それに続く大火災に見舞われ、パニック状態に一時陥った。彼が私有財産の消滅と、無政府共産制の具体的なイメージを得たのも、この時のことであると言われている。

秋水が本書を手放したのは、彼が再度上京した明治41年8月からの1年の間で、妻千代子と離婚、菅野スガと同棲していた時期に相当する。恐らく生活費の一部に当てられたものであろう。

本書の著者ミルズは米国社会主義運動の有力者で、カンザス州を代表して社会党全国委員を務め、右寄りの路線を代弁した。本書は1914年まで10回も版を重ねるなど、好評を得たようである。ちなみに全米総合目録には彼の著作は7点挙げられているが、当館は本書の外に、*Science of politics. rev. ed.* (New York/London, Funk & Wagnalls, 1888. 204p.)（請求記号 89 - 346）を所蔵する。

（アジア・アフリカ課 中林隆明）

『小野篁哥字盡』解題蛇足

当館の個人文庫展第2回目録中の『小野篁哥字盡』の解題に蛇足を添える。

当館所蔵の本書の諸版は、つぎのとおりである（括弧内は請求記号）。

- 1 寛文2年版 (わ370.9-5)
- 2 元禄5年版(影印) (KF43-3)
- 3 正徳3年版 (911.107-O754)
- 4 文政4年版 (わ370.9-3)
- 5 嘉永3年版 (わ370.9-4)

このうち、1が岡田文庫本、3が亀田文庫本であり、出版地は、1が京都、2・3が大坂、4・5が江戸である。内容は、1・2が原型、3以下には増補・付録がある。なお、請求記号で分るように、当館の目録は3を「作歌法」に部類するが、これは智者千慮必有一失であろう。そして、これを見つけるのも愚者の一得である。本書は和歌の作り方を教える本ではない。漢字の覚え方を教える本である。ただし、とんでもない与太も教えてくれる。たとえば、「樂」字には字義によって、ガク・ラ兔・ギョウその他の字音がある。それを本書は「らくがくぎょう、白自目也」として、「樂」「樂」「樂」の3字を挙げる。当時の文献に徴すれば、あるいは当時としてはこれでよかったのかもしれないが、その確証を得ないかぎり、これは横丁の物知りのご隠居でも言いそうなことである。そのほか、「開井はひらく」「閑ひとしくしつか」などと子どもに教えてよいものであろうか。

本書のように、漢字を偏・旁・冠などに分解して記憶の便とする教え方は、『瑣

玉集』に始まるという。これは北朝の康応元年の成立で、著者は信州小菅山の僧侶、一円である。その時代を言えば、足利義満が鹿苑院を造営してから5年ほどのちのことである。伝本には、室町時代の写本のほか、天和3年版・貞享年間版の刊本2点があり、当館には安永7年の写本がある（『北斗集』と合綴。請求記号127-102）。当館本の内容は、天和3年版と比べて相当の異同があり、「天一日月明」に始まり、「言非誹耻止耳」に終る271句を掲出する。これは、「テンハモツバラヲ・イニシテ、ジツゲツアキラカナリ」「ヒライ・テソシラバ、ハヂテヤミマクノミ」と読んで、天・明・誹・耻の字を覚えるというくふうである。「偶麗ノ句・俚語ノ字ヲ閩里ノ学童ニ授クルニ却ッテ庭訓ノ便有ラン」（原、漢文）とは著者自跋の手前味噌であるが、「女ハ嬉ヲ喜メドモ、言ハ意ヲ諷アリ」「女ハ兼テ嫌ヘドモ、心ニ相想ヘ」「女ハ友モ妹カシ、ロヲ同ジクシテ啗フ」だの、あるいは「女ヲ戀イ戀ヒツ・心ニ任セテ恣ル」だのは、純真な「学童ニ授クルニ却ッテ」教育上、有害なのではあるまいか。著者が僧侶だというのに、これはどうしたことであろう。

『瑣玉集』にせよ、『小野篁哥字盡』にせよ、このような言葉遊びめいた小細工は、漢字教育の本来から考えて、むしろ邪道もよいところだと言わなければならない。また、実際上の教育効果を挙げ得たとも思われない。漢字は文章のなかで、少くとも熟字あるいは成句のなかで、筆順にあわせて学習すべきものである。けっして漢字一字として学習させるべきではない。これが漢字教育の正道である。

（参考書誌部 山内育男）